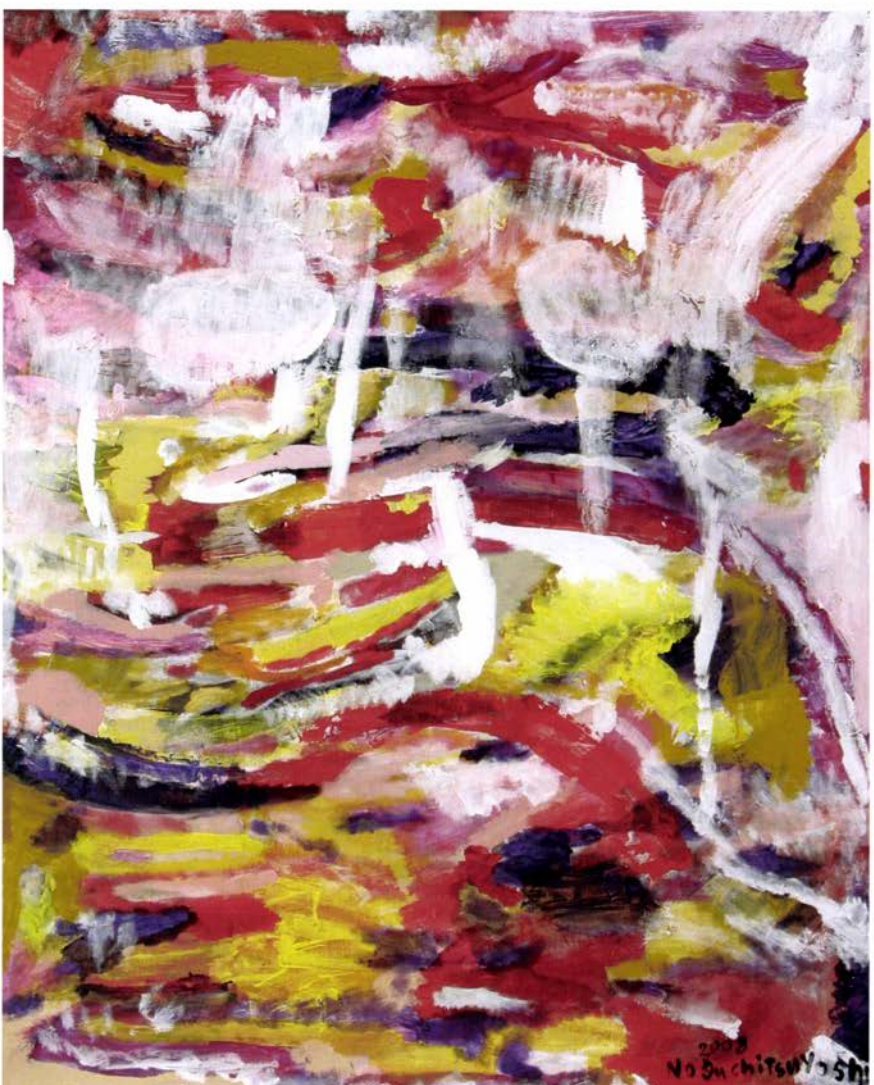
晴

h a r e



晴　（はれ）　　第１号

目　次

遊びの系譜遊びの実践　佐山哲郎　2

■ 川柳

鬱るんです　きゅういち　6
ふ　り　松永千秋　8
【輪切りにされた人、そのほかの言葉】　月波与生　10
その先　広瀬ちえみ　12
バルバラの鷲　水本石華　14
空　腹　樋口由紀子　16

■ 評論＆エッセイ

と　広瀬ちえみ　18
季語を泳ぐ川柳　①　水本石華　20
むさし句集『亀裂』
　まだ見ぬものに逢いに行く旅　月波与生　23
戦略　松永千秋　26
ぐーぐる明日　きゅういち　28
川柳を書く　川柳で書く　川柳にする　樋口由紀子　29

■ 後記　樋口由紀子　34
■ プロフィール　35

表紙絵　野口毅

遊びの系譜遊びの実践

佐山　哲郎

五十年このかた遊び続けてきた。遊んでばかりいた。

父祖の時代はともかく、いまや「遊び」を悪徳のひとつとして糾弾する手合もあるまいが、いい大人になっても遊び続けているのはいささか肩身の狭いところもある。

十代の頃、ヨハン・ホイジンガの唱えた「ホモ・ルーデンス（＝遊ぶ人）」の概念にいたく共感した。心の中に何かイメージが湧くと、そのイメージを操り、イメージに操られることに夢中になった。そんなことを繰り返していると、現実はどこか遠くなっていく。

ホイジンガなど持ち出さなくとも本邦にだって、遊び人後白河法皇編の『梁塵秘抄』があり、「遊びをせんとや生れけむ　戯れせんとや生れけん」という今様歌謡の至言がある。

かつて編集に携わっていた月刊誌に「この世に存在しない書物の書評欄」を設置したことがある。隅田川乱一という筆名の書評子が生まれ出て、存在しない文化人類学者による、存在しない地域の風俗文化に関する研究書の紹介など、抱腹絶倒の面白さであった。

それから随分の月日がたって、神保町のとある出版社の一室で飲み交した作家松山巖が、垣芝折太という別名で『偽書百選』を上梓したことを知った。同じような「遊び」を遊ぶ人がいるんだなあと妙に得心した。

英米語圏ではパロディやアナグラムがそれなりに尊重され、文芸の一ジャンルを形成している。雑誌『ニューヨーカー』の作家アップダイクは、一篇のエッセイを書く前に、この世に存在しない地域をイメージし、その地に伝承されたという呈で、いい加減でもっともらしい諺や、シュールで何の効力もない怪しい格言を創出し、一覧表を作ってから執筆に入った。

動物学論文では『鼻行類』という奇書が傑出している。鼻で歩くという実に珍奇な哺乳類に関する研究書である。この新発見（？）動物の調査中にハイアイアイ諸島において行方不明となったとされる著者はハラルト・シュテンプケ。もちろん架空の人物で、正体はまっとうな動物学者のゲロルフ・シュタイナーである。

我が国には川柳とか俳句とか、きわめて知的な「遊び」が伝わっており、なにも作家や学者でなくとも、そこらじゅうでイメージと遊ぶことができる。これは諸外国から見るとかなり奇異なことらしい。ま、そのあたりは「チチンプイプイミヨノオンタカラ」というところだが、いろは歌留多なども格言なのか諺なのか、きわめてナンセンスで異形の伝承であり、遠くマザーグースなど想起させる。

「犬も歩けば棒にあたる」について酒席で論じていたところ、ミュージシャン近藤十四郎が「犬も歩けない」という意味不明のフレーズを慣用句にしようと言いだした。理屈っぽいのでは「飛ぶ鳥の目を抜く」とか「ボタ餅の棚上げ」などが満場一致で決定した。この手では寺山修司に「論より勝負」の名作がある。

そんなわけなので一億総詩人とはちと言い過ぎだが、私もまたインターネットの掲示板を使って、連句で遊んでいる。

その連句の成果といってはなんだが、十年ほど前に、七七コレクションなるものを試みたことがある。

月天子 Gallery　蔵出し［七七コレクション］の御案内

このたび、当 Gallery の連句資料室に長らく埋設展示しておりました歌仙より、七七の短句のみ抜き出したらどーだろか企画展を思いつきました。もとより歌仙における付け句（発句に対しては平句）とは、前句、前々句への付き離れのみ意識して、流れのなかで役割として書かれたものであり、一句独立させて読むものではないし、しかも、なかんずく七七の短句ともなれば、一層独立性は薄くなり、また連衆諸氏も、まさか単独で世に晒すなどとは夢にも思っておりませんでしょう。したがって、何をしやがる、というお怒りの声もあろうかとも思いますが、そこはまあ、万障お繰り合わせいただきまして、楽しんでいただければ幸甚です。（文責・月天子 Gallery 主人・なむ烏鷺坊こと佐山哲郎）

（烏鷺坊盲選）

ばかと云つては交はすくちづけ　ゆかり
割礼用のメスを届ける　なむ
獄吏獄吏と続く家系図　なむ
高野豆腐をめざす青年　ゆかり
村の名前で遺す暗号　なむ
田螺と思ふ的の真ん中　天気
転生のたび破る約束　鳴海
樽に頭蓋のごとき白菜　なむ
あすは海市に祭あるらし　十四郎
臨終まぎは届く羊羹　東人
二頁前の挿絵に戻る　なむ
コホンと言へば尾崎放哉　天気
兄がをんなに変はる鏡台　天気
闇の深さに似てインセスト　志

ストッキングに柚子を詰めこむ　振り子

いささか長い引用になり恐縮至極である。二流の絵画展を速歩で巡るようにお読みいただきたい。問題はこれらの句が直前の長句（五七五）へ付けて詠まれているがゆえに現出したことであり、ここに至っては、その長句の方を想像することは困難であるということである。ここでは長句はいわば幻。そして、これら七七句はこれから何処へ行くか何に向かうかも考えず、そっと置かれるか、あるいは次の長句へと（なかには揚句＝最終句もあるが）擲り投げられていて、それ以上の分析も論理的解釈も受け付けない。

これらはとりあえず「遊び」の断片である。

しかし中江俊夫の『語彙集』に俟つまでもなく、断片の蒐集が何物かである（ときにはそれは詩と呼ばれることさえある）こともまた否めない。

ホモ・サピエンス（＝賢い人）に対してベルグソンはホモ・ファーベル（＝作る人）と言った。これでは少し世間が窮屈だなということで、遊ぶ人が考え出されたのだろうか。

東京練馬にいつ行っても閉まっている不思議な古書店がある。「石神井書林」。店主は内堀弘。その人はこう言った。

「度を超した無駄は神聖に思える」

鬱るんです

きゅういち

耳かきのフェチでガテンな創造主
全能神電車が来ないのを愚痴る
天上のパート勤務のこれが辛いの
観覧車止まる天使の発情期
須弥山は息み無意味の実のたわわ
最後の晩餐　スタッフ急募
十二使徒みんなオフショル着ておはぎ
ゴルゴダのその日の出口調査員
煉獄はムード歌謡の乳白色

地獄このマニアの歓呼また歓呼
方舟に薄く聴こえる佐渡おけさ
弁当の煮物のおつり聖骸布
グレゴリオ聖歌の暴力的な歯茎
ローファーの踵つぶして来る聖夜
福音の陰から飛ばし合う輪ゴム
違うとは言えなくなった救世主
うしろから齧ると孕みます　りんご
自涜後のエデンの園の宮大工
自涜後の六欲天がリコーダー
天界へ徒歩で行けますＢＡＲ「マリア」

ふり

松永千秋

爺さんの帽子明日へまっしぐら
しゃっくり続くエレベーターは急降下
死んだふりだったか生きたふりだったのか
緊急連絡スリッパはありました
全身の力を抜いているバナナ
枯れましたお力添えをいただいて
死なないと死ぬの間の朝ごはん
散る時も力を貸してくれますね
制服のフリルがすこしずつふえる

のぞかせるだけのうすもも色ですが
お連れさま…ではありますが泣き上戸
本棚に居座っている日本書紀
偽物でした本物のとわかるまで
踏んばっているのは一人だけらしい
制服の隠しボタンの中の飢え
寄り合ってドストエフスキーつつきあう
黒　黒　黒　クレヨンの涙
もぐら塚ハシもハシゴも浮き沈み
暗喩には椿が五六輪欲しい
忙しい呼吸をしているだけなのに

【輪切りにされた人、そのほかの言葉】

月波与生

種明かししてる輪切りにされた人
フロイトは象と解体されたがり
島津家がヘブンといった臍の下
むらさきになるまで蟻が死にに来る
誤射をするサジタリウスの発汗度
殺された場所へ戻っている鸚鵡
座布団は尻の正義を記憶する
アコーディオン奏者が去った木偶の店
一面に載らない鳥の近代化

踝の知らない歌で曲がるバス
約束の破れぬ人も連れて行く
ロマン派はつらい朝にも窓を開け
梔子の吐息冤罪者が落とす
紅を差しやらせ番組ばかり見る
非正規の海馬に脱臼癖の痕
死に切れぬ蝉と黒鍵取り替える
どこまでも鶏卵割れて安息日
鯖として生きてしまって胃が痛む
押し花を貼り火曜日になりすます
審判がくだり脱毛するホルン

その先

広瀬ちえみ

その先のソノサキさんの庭の花
雑巾をサキザキさんは縫いためる
おとなしいチンピラキンピラピロリキン
弦が切れ緊急オペの最中なの
美しく赤く却下と捺されたり
桃色になったかしらと蓋をとる
糊づけは固めに鶴の全身に
靴下を三枚はいて棒を持ち
ぶよぶよは相当深いところまで

増えている発表会の馬の足
刺草の茂みの中の落とし物
それとなく妹としてヒヤシンス
首が出る最新作の亀裂から
脱ぎっぱなしの水掻きどれが誰のやら
中空のあたりうろうろしておりぬ
つなぎめへえんしょうどめのなんこうを
飛びたったところに栞はさまれて
かんぶにもこんぶにもよくいいきかす
大根のような梨だと言われちゃった
たっぷりとミルクを飲んだ後の晴れ

バルバラの鷲

水本石華

ハロウィンのかぼちゃも馬車になれた筈
毒茸の悲鳴を聞いていた夜明け
旭日旗似合いますかとヒガンバナ
すいとんがグルメになって帰還する
アリスがくぐり抜けた猫ドア
ハブの五年酒から背筋が伸びる
ＵＦＯを書き漏らしてる明月記
床につくまではと立って柿を剥き
両手の中に残る海鳴り

正座して卓袱台があるローハイド
生きている気がするから怖い
禁じ手がはじけ散ってる民主主義
今時のガキに名人たちがゆれ
ちゃんとする迄人形は名告らない
母さんの兎を逃がす地下通路
ひかりのなかを歩む悪党
腰痛を言えぬ六足歩行ゆえ
楽しさはレッドブックに載ってから
スクリューに酔う止り木は虹消える日
もう降りていたバルバラの鷲よ

空腹

樋口由紀子

どのパンを咥えて現われ出てくるか
生椎茸に似ても似つかぬ大根だ
生醤油を舐めてわかったふりをする
待遇はまんなかぐらいのぶなしめじ
冷凍庫に蛸の頭を補充する
肉を盛る菊の模様の皿の上
ちょうどいい硬さにならぬ鼈甲飴
広島やキャベツの千切りつながって
新宿に呼ばれています黒大豆

寂しいね角砂糖のほかなにもなし
手に葱を持つのは少し早すぎて
綿菓子の必要以上に巻く事情
たこ焼きは熱い熱いと巫女の言う
とびきりのケチャップそしてマヨネーズ
割れた卵以外はどれでもあげる
ヨーグルトにうしろめたさがあるきっと
詳しくは知りませんけど　ブルーチーズ
蓮根によく似たものに近づきたい
みっともないことになってる芋畑
空腹でなければ秋とわからない

と

広瀬ちえみ

こいびとと妻の知らない鳥を飼う

石部明（『賑やかな箱』１９８８年刊）のこの作品を『セレクション柳人石部明集』（２００６年刊）で見ている。『賑やかな箱』は私が川柳を始めたばかりの頃の句集だが、一〇〇句で書かれた小説、そして読んではいけない小説を読むように開いていたなあと記憶している。ここには男しか描かれていないのだから。たとえ妻や姉や妹が出てきても、男の視線で創られたものだ。創作することを強く意識していた作家のひとりであると今でも思っている。石部明はもう死んじゃったから、作品を全貌できるのは『セレクション柳人』なのでときどき開く。

さて、掲句だが、助詞の「と」がこのような働きをしているのは私が調べたところ、セレクション柳人のなかではこの一句だけである。このような働きと言ってはみたものの、学者のような説明はできない。感覚だけで述べることになるだろう。

初心者の頃は、つまりこの作品と出会ったときは、よくあるドラマのように読んでいたように思う。夫にはこいびとがおり、こいびとの部屋では鳥を飼っている。妻はたぶん知らないだろうが、うしろめたく、少しどきどきすると。鳥は鳥そのものとも、メタファーとも読める。インコや文鳥でもいいのだが、家では食べない食べ物でも、妻の前では着たことのない色のシャツでも、家では聴いたことのない音楽でもいい。ちょっとした図にすると、こいびとと僕は妻の知らない鳥を飼っている。「と」のなかに「僕は」が隠れているのだ。この図式で読んでいるうち、だんだんこの読みがつまらなくなってくる。「石部明（いつのまにか創作されたはずの男が石部明になっている）よ！勝手にすれば！別れてあげるわよ。ここにハンコをつきなさいよ！」と言うかもしれない妻。でも、またもとのさやに戻ってしまうかもしれない生活。ああこの読みはひどくつまらない。なんか男が小さく見えて、その正体がわかってしまうつまらなさに気づいたのは、もう少し月日がたってからのことである。

あーる日突然♪である。この男の正体はそんな小さなものではなく、遠い遠いところを見ていることに気づいたのは。

男は、こいびとも妻も知らない鳥を僕は飼っているのだ。「と」と「の」は「も」の働きをしているのだ、と思った瞬間、作品が大きくなった。こいびとからも妻からも離れたところにいる男の得体の知れなさ（孤独な姿）が魅力的になってくる。妄想かもしれないが、男にはもうひとつの家がある。いやひとつだけではない。男の精神のなかでは無数にあるだろう。いや家なんていうそのものがない。生活者でありながら、ただただ漂っているこの男にとっての「鳥」はいったい何だろう。誰かにわかってもらおうなどとしないし、わかってたまるかとも思っている。

はじめの頃の読みとくらべたら、こちらの男は詩的空間を獲得していると思った。

では、石部明はなぜ「も」を使わなかったのだろうか。この作品のそばには「も」を使い同等の価値をもつことばを並べている作品がある。

手も足もおなじ景色に辿りつき
にくしみもふたつ枕も二つある
たましいも母の背鰭も簾越し

これら三つの作品の「も」にはなんの疑問もなく必然として捉えられるが、

こいびとと妻の知らない鳥を飼う

この作品が「も」を使ってしまったら私にとっては、やはりダサイ作品になってしまうのだ。言い切ってしまうことのうるささを感じるのである。

石部明は「詩は、決着がついてはいけない。いつまでも漂っていなければならない」、と言っていたという。

漂い続ける詩的空間を生み出す「と」は石部明の技術だろうか？ 意識していたとも思えるし、石部明にも作句における初期があったはずでドラマのような作品かもしれない。今となっては、問いただす術がもうないことをとても残念に思う。

たぶん訊いても、ニヤニヤするだけで、答えは言わなかったと思うし、どちらでもいいよと言うかもしれない。私は妻にもこいびとにも悪い男であってほしいと思う。

いつだって、死の方が先にやってくることを、この歳になって痛感している。

季語を泳ぐ川柳　①

水本石華

川柳とは何かと問われ、又自問する中で、答らしきものに最後まで近づけたという思いがないのは、心許なくもあり不思議でもあり、そのことが却って川柳から立ち去りがたくしているというところもあります。

川柳の定義や説明は様々になされていますが、「前句付」から発展して来たこと、「切字」や「季語」にとらわれないということ等大きな特徴とされます。それは「俳句（発句）」を念頭においてのことで、そこにさらにもう少し広い、俳諧（連句）の視野の中で説き起こされ、整理されることで、もっと見通しが利いてくるということも予想させます。そのような意味で、『川柳と俳諧』や『川柳探求』の中で、前田雀郎が川柳を実践の上でも論考の上でも俳諧（連句）文芸の構図の中に位置づけようとした企図は今なお卓見というべきものと思います。口幅ったいことを言えば、川柳に俳諧の視点を取り戻すのは、川柳を蛸壺から外の世界に誘い、川柳を生き生きと蘇生させるのに貢献出来る道を拓くのではないかと感じています。

前田雀郎は、川柳は俳諧の平句の精神を受け継ぐものだと言います。これは、俳諧の発句（俳句）は他の句に付く付かないを念頭におく必要はないが、平句は取材を広く、変化を求めなければならず、そのためには花鳥諷詠にのみ閉じこもるわけにはいかず、神祇、釈教、恋、無常、あらゆるものを採り、連句の進行に千変万化をつくらなければならない、そのような役割を果たすのが平句であり、そこに重ねられる川柳の可能性も拓けてきます（『川柳と俳諧』「俳諧から川柳へ」）。このことは言い換えれば、川柳のデラシネ性を所与のものとせず、もう一度出生の地に戻ることで、創作の上で課題をもっと明確化するのにつながるものと思います。

連句には、「発句は大将の位、平句は士卒の働き」という言い方もあります（許六『宇陀法師』）。平句は大将のようにじっと動かずつぶしの利かないものであってはならず、あらゆる場面に馳せ参ずるフットワークと自己を際立たせない美学が求められます。そういう意味で平句は〝中腰の文芸〟ということが出来ます。歌仙三十六句の中で発句・脇・第三・挙句以外、他の三十二句すべてが平句のフィールドなのです。一巻の中での豊かな変化を演出する主役は平句で、その平句の精神を受け継ぐ川柳でありたいというのが雀郎の思いであり、大いに共鳴するところです。

「川柳は切字や季語にとらわれない」のが特徴と書きましたが、川柳人にとって季語とは何か、ということに暫く

は焦点を当ててみたいと思います。川柳の中に現れる季語が一句の中でどのように調和しているか、あるいは齟齬を来しているか、そこの問題を実作者として共有して行きたいと思います。川柳は連句一巻の中の平句の置かれた運命を生きる、という言い方が大げさであれば、連句の変化の演出者としての様々な演技の幅を見せられますが、この「演技の幅」は季語の扱いの中に鋭く端的に現れます。実作の中で季語がどのように意識されているのか、語の規範性を無力化するどのような苦心があるか、「川柳の中の季語」に注意を払いながら、自分自身の実作の指針も見つけられればと思っています。その場合、最も季語力（季感の喚起力）を持つ言葉を選んで実験してみます。つまり、「あなたのは俳句ですか川柳ですか」と言われる危険水域を歩き続けるという意味です。それでなければ見えてこない「季語の陥れる力」を感知することは困難でしょう。

季語の濃淡ということで、樋口由紀子さんの川柳を例に使わせて頂きます。『容顔』（一九九九年刊）に出てくる季語を含んだ作品です。この作品集には二百六十三句中季語を含む句は八十三句ありますが、季語の割合が多いのか少ないのか、ここから見えてくるものについての見通しは、今のところ白紙です。

夜桜の高さに並ぶ複数の他者

・夜桜と言えば東京では千鳥ヶ淵を思い浮かべますが、近くには靖国神社もあります。そうすると自然「夜桜の高さに並ぶ複数の死者」の累々のかばねを連想するわけで、西行の「ねがはくは花のもとにて春死なむその如月の望月のころ」にもあるように、桜花の本情にそった句であることは確かです。

罪状は書き出してある雛遊び

・この句もちょっと見には唐突な感じしますが、雛壇に居並ぶ人たちに下る悲劇の場面にとりなせば、禍福あざなえる縄の如き人生にいつでも起こり得る状況と言えます。これも雛遊びの本情を離れた句ではありません。

黒揚羽の黒に似ている末のおとうと

・「黒揚羽の黒に似ている」は気紛れ・暴力・非妥協等々を連想させますが、この造型は作者の「おとうと」のイメージの投影で、そのようなものを引き受けるものとしての季語の利用になっています。

白桃を踏んだと母が告げにくる

・認知症の進んだ母が熟し切り崩れかけた白桃を踏んでしまえば、踏んではならないもの（白ではなく黄金の）を踏

んだ報告義務に目覚めるでしょう。この句は「白桃」に季語としての働きをもとめておらず、俳句的な鑑賞から離れた川柳独自のメタファーに傾斜しています。

蝸牛見つける自律神経失調症

・ヒトの聴覚を司る器官である蝸牛への血流不足から、めまい・耳鳴り・ふらつき等の自律神経失調症に発展すると言われます。こうなると「蝸牛」は夏の季語であっても何ら季感には関わってこず、俳句が追いつけないところに入り込みました。ここに至って季語の無力化が達成されます。

以上の五句は、一句の中での季節感の濃度に添って並べてみたものですが、こうした季語利用の濃淡を川柳作家はどのように意識しているものなのでしょうか。俳人の場合は一句の成否に季語の斡旋が大きく関与しますので季語への感度を常に高めておくことが必要になりますが、柳人にはこのような態度は希薄で、というより歳時記的な自然観への偏向をまぬかれるところに活路を見出しています。とは言え、柳人が意識せずとも、季語・歳時記の発信力は言語環境の隅々にまで浸透していて、川柳にとってもまっさらな画布というものはありません。季語という制度から自由になるには「歳時記は持たない、使わない」という手っ取り早い対応策はありますが、やはり、時間はかかっても、一語一語首実検し、言葉の危険度（可能性）を吟味していく他はないと感じています。その具体的な指針はやはり、「川柳が俳諧の平句の精神を取り戻す」こと、このことにあると感じています。この中では、季語の扱いには濃淡があり、アコーデオンの蛇腹のように伸びたり縮んだりすることに気付かされます。芭蕉の連句にある「銘を胡蝶と付しさかづき　翁」（「めづらしや」の巻）では、季語はもはや記号でしかなく、こういうノンシャランは季語の本意に忠実であろうとする俳人からは目を剥かれるでしょうけれど、かつては存在した俳諧の自由闊達さです。このゆたかさを奪還するエネルギーと渇きがあるのは、俳句よりも川柳の方が上かも知れない、と今は思い始めています。本題「季語を泳ぐ川柳」は、川柳も上手に季語を生かしましょうとの意ではなく、季語の圧力の前に押し黙ったり気がつかぬふりをするのではなく、季語とのさらさらとした関係を見つけていきたいというものです。その前提になるものを実作例を通して提示し続けたいと思います。

むさし句集『亀裂』
まだ見ぬものに逢いに行く旅

月波与生

言葉というものはやっかいなもので、心の中のつぶやきであれ、独りごとであれ、大人数を前にしてのスピーチであれ、言葉としての意味を持つと、それを理解してくれる他者を探してしまう。作者の意はどうあれ、発信力を備えてしまうのだ。

だが哀しいことに言葉は、言葉自体が期待したようには決して伝わらず拡散していく。

前提としてわたくしたちは、正解のない曖昧な言葉の中で、人間関係に対して折り合いをつけていくしかない。毎日繰り返し発信される無数の言葉たち。その言葉の意味をすべて理解して生活している人は皆無であろう。

言葉の意味を理解しなくても、人は恙無く生きていこうとする。そして理解されなかった言葉たちは、意味だけを澱のように漂わせ、置き去りにされていく。

ナノハナナノハナココロガイタクナイデスカ

七十億人が同時に生きていながら、多くても数千、ほとんどは数十、あるいは数人としか関係を持つこともなく、消えていく人間。

しかしそんな現実であっても、人は他者と繋がろうとする。例えあなたの言うことがほとんどわからず繋がる道さえなくとも、繋がろうとする。

ここから見えない他者は計測不能な大きな穴であり、他者と自分を繋ぐものは線ではなく亀裂でしかない。

その亀裂を辿って他者に会いに行くか、穴の中で、宛てのない発信だけを繰り返して生きるか。

むさし句集『亀裂』を、そのような、他者との関係性を選択するための「言葉」として読んでみる。

本棚の右から旅が始まった
オニアザミそんなバス停から乗った
あなたまで真っ直ぐ細い線を引く
月光の亀裂を抜けて逢いに行く
どこまでも階段降りて行けば　空

作者自身、「句は無作為に並べた」と書いているが、無作為の最初の句が、旅の句というのは暗示的に感じた。旅は孤独の成長であり、最初の句と最終句の風景は違う、と宣言しているのだ。

本棚では、本の主のお気に入りの言葉が右から左へと続いていく。言葉と言葉を結ぶものは線であり亀裂はない。この後、句は他者を見つける旅に出て、作者の言葉を理解

できない世界と出会っていくのだ。
その思いは二句目のバス停で待つわたしへと引き継がれる。三句目の他者との関係における細い線。四句目の自然と対峙したときの大きな亀裂。細い線にしても、大きな亀裂にしても、まだ他者と繋がろうとしている。亀裂を抜けてまで逢いたい他者がいるとは、なんと哀しいことか。
そして、それが果たせないと知る五句目。
階段を降りていけば空がある、とはどういうことだろう。ここでは、自分が持つ世界にないもの（空を指す）は、普通の方法（空に届くには上を目指すこと）では叶わないことを示している。見上げるはずの空は、他者と関係を持とうとするとき、階段を降りて届くものに変わってしまう。言葉が発信され届くとき、言葉の意味はねじれ始める。
この句集では、月、海、花など自然と対峙する「私」は、とても見通しがいい。対して、他者と「私」の関係を書いた句にねじれたものが多い。むさし句集だからか、川柳の言葉はみなそうなのか。興味深い。

亀裂。

月光が咲きます笑ってくだされば
人という穴が無数に立っている
月よりもはるか遠くに君がいる
飛び降りてよいかあなたのてのひらへ
止めてくれどんどん人が好きになる

一句目。笑ってくれたら月光が咲くという。そんな嘘をついてまで繋げておきたい他者との関係とはなにか。二句目。とはいえ、期待すると絶望も早く訪れる。人はみんな穴である、というのは希望である。穴には辿り着くことができるのだから。三句目はまた一転して渇望する。前へ進んだり、しゃがみ込んで悩んだり、希望と絶望を繰り返しながら、関係を維持するための亀裂は進んでいく。四句目。飛び降りたいと思う掌は、死を覚悟しながらも死ぬことのない掌である。他者を探しながら、巡りあいたいと思う掌。祈りの句。
五句目。それでも他者の優しさを夢想する。現実は亀裂しかない関係だとしても。人を好きになってしまうことの希望と、他者との関係を好意的に維持し続けなければならない絶望と。「止めてくれ」という叫びは、にこやかなものばかりではないのだろう。

亀裂。

友が来る吹雪の海を引きずって
友よ眠れもう起きなくていいんだよ
さよならを言わない人の立ち泳ぎ
また来るといえないんだよスミレたち
明日は来る　死んだあいつがそう言った

他者との関係において最も親密であるだろう友の句。ここでも注目してしまうのは、「約束」をしないということ。

お互い生と死以外に確かなことがないとすれば、約束できることは何もない。約束はお互いを結ぶ線の関係であるが、約束ができない者同士が、親密な関係を結ぶときに頼れるものは何であろうか。

一句目。「吹雪」もまた、この句集での重要な情景である。北国の吹雪は、人のぬるい関係性を削ぎ落とし、生死の境目へと突き落としてしまう。そのようなものを、友が引きずってくる。中にいれてやれば、自分も吹雪に飲み込まれてしまうのだ。二句目。この世から自分の理解者を失う悲しみ。そして自分も相手を、もう理解できない哀しみ。三句目。友が去って行く。立ち泳ぎで首から上だけ元気な友として。首から下の友も、もちろん作者には見えている。四句目。愛しいほどに、言葉は直線的であり、ねじれていく。五句目。死んだあいつに明日はなく、自分ひとりに明日はくる。望んでいなくても明日がくる。その明日には、逢いたい人はいないねじれた現実。

亀裂。

遊ぶ金ないのでずっと見てる空
夜へ夜へ転がってゆく僕のフタ
すいません鼻が曲がっていませんか
月光の木馬はいつも一人乗り
自画像に三つ目の目を描き入れる

旅はおわり言葉は他者から自分へ戻る。

ひとりに戻り、かつて階段を降りなければ見えなかった空は、金がなくてもずっと見ることのできる存在になった。二句目、もう僕のフタを受け止めてくれる人もなく、とめどなく転がってゆく。三句目、他者がいないと確かめようもない鼻の位置。曲がっていたところで、そのことをいう人はもういない。四句目、月光も、すでに愛しい人へ逢いに行く道ではない。ここで亀裂とは、他者との関係を示したことであることがわかる。五句目、この句集の最終句となる。長い旅をして、たくさんの他者と会うことを渇望し、「どんどんひとが好きになった」男が旅から戻り、最後に吐いた言葉が「三つ目の目を描きいれる」である。

これはどういうことだろう。

三つ目の目を持つと、直観力がさえわたり、真実が見えるといわれている。描き入れる、は三つ目を持った、ということではなく、持てば、他者が発信してくる言葉の意味をすべて理解でき、歪まない関係を持てるだろうか、という作者の問い掛けに思う。

川柳を言葉として発信するからには、発信されるすべての意味を理解したいし、理解できる相手にもめぐり会いたい。

句集『亀裂』から、そのような、川柳作家の業を感じている。

戦　略

松永　千秋

連日33度35度の日が続いたかと思うと豪雨、この夏はその繰り返しで草や木は生命力全開、伸び放題である。雑草は荒れ地に生えるというがとんでもない。きちんと手入れされた庭でも日当たりさえよければどんどん茂る。

草の種は隙あらばと手ぐすね引いて待っている。どんな小さな空地にでも芽を伸ばしすぐに種をつける。種をつける前になんとか抜いてしまおう、とがんばっても、とてもとても、かえって草を抜いたことで土の中で出番を待っていた種が光を浴びて勇んで顔を出す。同じ種類の草がひと夏の間に何度も芽吹き、その度に種になるまでの時間が短縮されるからたまらない。

たとえばの話だが春に一粒のコメを播いたとして秋には千六百粒収穫できるそうだ。その伝でいえば雑草の種の増え方も推して知るべしだ。

今年、平成29年1月から5月までの間に三度眼の手術を受けた。術後少なくともひと月からふた月、もしくはそれ以上土いじりは止めるように言われたが、時々は少し草を抜いたりもした。その後は猛暑が続き草取りの段ではなかった。

かくして今、草は実り豊かな秋を迎えている。ようやく重い腰をあげて草取りを始めたところだ。まだ今も太陽はジリジリと照りつけて疲れることこのうえない。庭を眺めてはため息をつき、抜くことしか考えていない、嫌ってばかりの雑草。

土いじりが出来ない間、すこし植物の本を読んでみようという気になった。そこで『植物の不思議なパワー』田中修著を選んで読み始めた。すべての生物は遺伝子を遺すという事だけの為に生きているといっても過言ではない、といわれている。人間は食べ物を食べて生きているが、植物は光合成により生きて行くための必要な物質を自分で作るので、食べ物が無くても成長できる。しかし自身がたくさんの栄養素を持っていると言う事で、昆虫に食べられるという宿命でもある。そこで植物はさまざまな戦略を以って種子を遺すことに全力をつくしているという書き出しである。

—ふうーん、植物の戦略？

動物が生殖の相手を探して動き回るのに比べ植物は動かない（動けない）。別に動かなくても一つの花にオシベとメシベがあって簡単に種子が出来るし、何の問題もないと思っている人が多いと思うが、そんなことはない。花は自分の花粉は自分のメシベに付かない構造になっているそうだ。同じ花のオシベとメシベで種子をつくることを望まない。というのは環境を変えることでいろいろな性質の遺伝子を持った子孫を残すということが植物にとって重要な任務なのだ。

—へーそうなんだと再びびっくり。知らなかったなー。

なかにはオシベとメシベが成熟の時期をずらしてお互いの接触を避けたりと、さまざまだ。そして葉や花を食べにくる昆虫や鳥や風までもが健全な遺伝子をもった種子を遺す、ということに大きな役目を担うことになる。そのために花は多くの花粉をつくり、魅力的な香りや蜜のお土産まで用意して虫を誘い込む。巧みな植物の戦略である。一億数千年前に出現した植物は瞬く間に地球を覆い尽し同時に昆虫も爆発的に多様化していく。

植物の歴史は昆虫との戦いの歴史でもあった。

大部分の野生の植物は昆虫に対する毒（防御物質）を持っているのだそうだ。有毒であったり、アクや匂いが強かったり強烈だったり、それもこれも防御策の表われだそうだ。

人間が好んで食べるキャベツやアブラ菜科の植物は昆虫に対して強い有毒物質を含んでいるそうだが、ある種の昆虫、特にモンシロチョウはこの有毒物質を克服し好んで食べる。しかし蝶自身の持っている物質とまじると、寄生蜂（他の昆虫に卵を産み付けて寄生する蜂）を誘い込む物質になる。そこでキャベツを食したモンシロチョウはこの寄生蜂に卵を産み付けられ死に至るという宿命を負う。この寄生蜂は大部分の昆虫の強力な天敵だと言う。

他にもたくさんの植物が殺し屋や護衛を雇って様々の形で身を護っているそうである。

—まだまだびっくりするようなことが満載のこの本、とてもとても面白かった。

じっと動かずただそこに生えているだけだと思っていた植物の底力に驚くばかりだ。そして今も進化中だという。これからどんな戦略を繰りだして来るのだろう。

植物（雑草）恐るべしである。

ぐーぐる明日

きゅういち

スペインがカタルーニャ州の独立をめぐる動きに揺れている。州都はバルセロナ。ガウディーのサグラダファミリアや伝統行事「人間の塔」でも有名だ。もともとアラゴン王国が統治していたのだがスペインの王位継承争いに敗れ１７１４年にはカタルーニャ語が禁止されてしまう。１９３１年自治制度は復活したのだがわずか五年後に内戦がぼっ発、フランコ将軍の独裁により言語だけでなく文化までもが弾圧。それは１９７５年の将軍の死去まで続く。

そのカタルーニャが独立を求めるのは経済的な側面も、ＧＤＰはスペイン全体のおよそ二割。政府がそこから徴収した税金をほかの州にばらまいているという。大規模デモや一連の運動は２０１４年のスコットランド独立をめぐる住民投票のときにもあり、非公式の住民投票も実施された、今回は政府の投票妨害もあったが、結局独立宣言を可決。それを受け政府は憲法に基づく自治権停止の発動。独立運動を主導してきたプチデモン氏を「反乱」容疑で訴追するという。この稿が掲載される頃ははたしてどうなっているのだろうか？「歴史は全て実験の結果」つまりある条件でひとが動き、意思決定した結果こうなったはず、なのにいまだ学習できていないのも人間。

ある災害が起きると皆の為に何かしなければと思う。このとき仲間意識が生まれ、安心や信頼が高まる【オキシトシン】という脳内ホルモンが分泌されるらしい、同時に自分たちはすごい、他はダメとう意識が生まれ、さらに敵意や蔑視が最も近い隣人に向けられる。いま、双方が自分たちが正しいと思っている状態であり、最悪の場合これが戦争のきっかけになるのかもしれない。【絆】は怖いものかも。

なんにせよ言葉を奪われ文化を弾圧された今のカタルーニャの人々が持つ【オキシトシン】は推して知るべしだし、遠い国のできごととするのではなく「我が国にも」と立ち止って考えてみることも必要なのかと思ったりしている。

その大阪はわたしのと違います　久保田　紺

川柳を書く　川柳で書く　川柳にする

樋口由紀子

俳句誌「オルガン」（9号　2017年春号）の座談会「オルガンからの質問状　斉藤斎藤 × オルガン」において、こんな一文があった。斉藤斎藤さんは歌人である。

田島　斉藤さんは川柳についてどう感じてます？

斉藤　川柳？私、俳句もあまり分かっていないんですけど、俳句は何となく「お、いいなぁ」と思ったときに、「お、いいなぁ」にある程度の自信は持てるっていうか。俳句でいいと言われている句はわりと私もいいと思えるし、理解度があるとすれば自分が短歌を分かっているぶんの、まぁ四割くらいかなと。川柳は分かんないですよ、正直。あのね、不気味なの。

福田　岡井さんも『金子兜太の世界』に収められた「金子兜太といふキーパースン」という文章に、件の座談会で会った川柳作家のことを、「あの謎のやうな一群の川柳人たち」と書いています。「あれは一体なんだつたのだらう」と。

斉藤　あいや、お話ししたことのある作者はいい人だったですけどね、作品はほんと不気味で。川柳の「私」って、私からするとゾンビみたいなんですよ。短歌の「私」とは違って、なかの人がいない着ぐるみみたいに見える。え、これで終わり？って。面白いと思う気がする句も、これを私は面白がっていいのか、全く自信が持てない。川柳の人のブログを見たり、たまに句集をいただいたりして、面白いなと思ったりするんですけど、ものをいう自信が全くないですね。俳句よりさらに全然ない（笑）。

斉藤　川柳は文章の、短すぎて出所が分からないやつに見えるんです。明らかに話者がいる。だけどその話者がどういう人間なのかとか、どうしてこれを言ってるのかという意図が分かり切らないままに終わっちゃうので、ものすごく、私としてはむず痒い。怖い怖い怖い。誰？誰？って。

斉藤斎藤さんの言われていることはわかるような気がする。私も俳句も短歌もどこを見ればいいのか、どこに価値があるのかわからないときが往々にしてある。俳句界や短歌界で評価を受けている作品の良さがわからないときがあったが、徐々になんとなく、ああそうなのかともわかるようになった。慣れてきたのか、なんとなく、私なりに見えるようになった。惹かれる作品、読みたいと思う作家が出てきて、少しずつではあるが、自分なりの評価基準も持てるようにもなった。それが俳句、短歌の評価と異なっていても、それはそれでいいと開き直れるようになった。それは俳句や短歌を目にすることも多く、よく読んでいるか

らだと思う。川柳は他ジャンルに読んでもらう機会が少ない。たぶん、それほど多くの川柳を目にする機会もなく、あえて川柳を読みたいと思わせるものが川柳側に不足していることもあるだろう。斉藤斎藤さんの言う「不気味」「面白い」「怖い怖い怖い」はれっきとした評価のはずなのだが、たぶんまだ印象程度なのだろう。評価に繋がるほどのものではなかったのだろう。「不気味」「面白い」「怖い怖い怖い」の地点でとどまっている。それは作品力の無さと言わなければならない。次に繋げようとするほどのものが足りないのだ。だから、それ以上の関心はもたれずに、ストップさせてしまうのだろう。

福田　僕は俳句を面白がる回路と別に川柳を面白がるための回路を持っていないんですよ。だから、俳句として面白いものじゃないと、面白がれない。もちろん、それはすごく暴力的な読みだと思うから、川柳についてはなるだけ個人的な評価では書かないようにしています。

鴇田　俳句と川柳とで、読み方をあらかじめ切り替えていないのは、僕もそうかもしれない。僕にとって面白い五七五、という観点で読んでいて、ジャンル分けにあまり意味はないと思えるときがあります。

（注）

鴇田智哉さんの発言は納得できる。たぶん、私も読み方を切り替えない。俳句としてとか短歌としてとか別にして、言語表現として面白いか面白くないかで色分けしている。座談会はそれ以上川柳についての話は進展しない。ああ、やっぱりここ止まりなのかと思った。川柳をどう思っているのかと俳人や歌人に直接聞いたことがあるが、大概の方々は困ったような顔をされ、門外漢だからと体よく逃げられるのがいままでの反応である。

ここで別の意味で気になったのは福田若之さんの「俳句を面白がる回路と別に川柳を面白がるための回路を持っていないんですよ」という発言である。彼は俳句を面白がる回路を持っていることを述べている。私はここまで言えるほどの川柳の回路を持っているのだろうかと思った。私自身一体、何をもって、川柳の良し悪しを決めているのだろうかと、一挙に不安になった。私はいかなる回路を使って、川柳を読んでいるのだろうか。なんとも心許ない。

川柳は平板な身辺詠がもてはやされている。内容が理解できる、できないで評価が決まる場合が多い。もちろんその回路で川柳を面白がっていてはいけないとは思っている。日常べったりの、そうそうそういうことはあるあると共感して、なるほどと言わせるものが圧倒的に多く、常識的良識的な句が重宝されているが、そこだけを見ていては、言葉のおもしろさや本質が見えてこないだろうと思っている。川柳は句会、大会が隆盛であり、それが基本にある。わからないから抜け（入選し）ない。抜けなければと次はわかるような句を作ろうと思う。むずかしいとはねられたら次はむずかしくない句を出そうと思う。そのためにステレオタイプのわかりやすいものがよいという風潮にすり替

わってきた。川柳大会や句会で抜ける句が「川柳の面白がる回路」だと暗黙のうちに了承され、そこに疑うことなく安住しているのが現状である。川柳は人のこころのうちをうまく捉えたら、それはそれでいいが、それだけではない。「わかる」ことで安心し、「わからない」と不安になる。もちろん、わからないからそれが佳いというのではなく、難しく書かれたものに価値があるといっているのではない。「わかる」「わからない」のたった一本の回路ではあまりに偏狭であり、川柳はますます先細りして、狭量な文芸になる。その思い込みの回路を抜け出せたら、新しい世界が広がってくるはずである。

「川柳は読みの時代に入った」といわれて久しいが、さてどれだけ川柳の読みが浸透しているのであろうか。私の川柳の読みはこれでいいのだろうか。一体、川柳とは何なのだろうか。川柳の内にいてもたびたび不安になる。

句会、大会のマンネリ化を防ぐための一つの方策として、近年、同じ兼題の川柳を複数の選者が選ぶという共選が増えつつある。そのほとんどの場合、特選〈第一位の〉句は選者によって異なる。入選句もバリエーションに富んでいる。参考に近年、私が選者をした大会の特選句を列挙してみる。

触光十周年大会　兼題「触」

浪越靖政選

触角をきれいに拭いてから眠る　悠とし子

樋口由紀子選

触れなさい色の女王が通ります　広瀬ちえみ

浪越さんは全日本川柳協会の理事で重鎮である。「バックストローク」「川柳カード」で同人としての仲間でもあった。浪越さんも私もお互いの特選句は平抜きにも選んでいない。

第二十一回杉野十佐一賞　兼題「線」

徳永政二選

くつ下の伝線　蛍でていった　米山明日歌

広瀬ちえみ選

あと二回使える光線をもらう　北村幸子

佐久間裕子選

太かった線も何やらところてん　重森恒雄

むさし選

お静かにそろそろ線が唄い出す　能田勝利

なかはられいこ選　樋口由紀子選

江戸城をもそっと蚊取り線香せよ　岩根彰子

なかはらさんと私の特選がかぶったことは以前にもあったが、かなりめずらしいことであり、他の選者と特選が重なることはほとんどなかった。

第十回松江市川柳大会　兼題「センス」

平井美智子選

鯨にも蝶にもプリンにもなれる　門脇かずお

徳田ひろ子選

「コレデイイノダ」バカボンのパパポリシー　熱田熊四郎

樋口由紀子選

宇宙から持って生まれてきたセンス　小島蘭幸

「鯨」の句は徳田さんが抜かず、「バカボンのパパ」と「宇宙から」の句は平井さんが抜いていない。

川柳人のなかでも評価基準が異なり、「川柳を面白がる回路」が多種多様であることがわかる。共選の場合はそれが顕著に見て取れる。私は察してもらうことを前提にしての書き方はできるだけしないようにしているつもりなので、察することが前提としていると思われるものも結果的にはほとんど選んでいない。自分と共通するものの存在を確かめて安心したいとは思っていない。それよりも予測できなかったものが見えるものの方を選んでいる。句意がよくわかって、「読めた」という満足感は得られなくても、ありそうでなさそうなことが書かれた川柳に基本的に惹かれる。

今年七月に青森で開かれた「川柳ステーション2017」(おかじょうき川柳社主催)のトークセッションで柳本々々さんが私の〈非常口セロハンテープで止め直す〉の句について、このように語ってくれた。

現代川柳が元々個性的だったんですよ。ずば抜けて。ぱっと出会ったときに衝撃だったんです、何だこれはって。例えば、樋口由紀子さんの「非常口セロハンテープで止め直す」ってありますけど、そんな発想は普通に生きているとしないじゃないですか。非常口ってとっても大事なものだし、セロハンテープでとめたくないですよね。ちゃんとしてなければいけないものを、急にセロハンテープでとめなおしたりするって、どういうことなんだと思ってびっくりしたんです。

〈非常口セロハンテープで止め直す〉はまさしくありそうでなさそうなことである。柳本さんの発言は川柳内では相当珍しい。このように対応してもらえるのはありがたかった。一般的に川柳内部では「「何だこれは」は大きな減点対象であり、柳本さんのように「何だこれは」を「個性的」だとはほとんど捉えてもらえない。言っていることがおかしいだろう、そういうことはしないだろう、なにを書いているのだという理由ではじき出される。セロハンテープで非常口を止めるという神経が理解できない。つまりは納得できないものを可とはしない。非常口をこんなに軽く扱うことが、たぶん、不真面目だと却下される。セロハンテープで非常口を止め直す根拠がわからないのだ。意味内容、それがわかるか、わからないかそれだけで判断される。作品の価値を決めてしまう。理解できないのだから、もちろん共感できない。だから拒否する。柳本さんの面白がる回路は了解性、共感性に重きを置いてきた川柳人の回路とは明らかに違う。

いくら私でも非常口をセロハンテープで止め直すというような経験はない。そんなことはしないし、見たこともない。自句自解ほどおろかな行為はないが、わかりやすく説

明するためにあえて自分の句を俎板にのせてみる。たとえば、非常口が釘なら、せめてガムテープなら、まだ、頑丈だし、わかるのにというように思われたら、もうそれは身も蓋もなくなり、句は死んでしまう。非常口をガムテープとか釘とか常識的であればあるほど、書く意味が私にはなくなる。「セロハンテープ」は私のこだわりの表われである。ありそうな行為を奇想化する。少し滑稽な、歪な現実感を出したかった。非常口もセロハンテープも比喩と読んでもらってもいいが、出来ればそのままで読んでもらいたい。非常口をセロテープで止め直すことの効用がどうのこうのではない。実質的には有効性がないもの、不都合なことを受け入れる、そのように行うことを考えている日常を書いた。うまく伝えきれていないが、今生きている感覚をこのように書いた。自分の気持ちをそのまま伝えようと書いたのではない。しかし、書いたものは無意識であっても、結果的に私の主観・心情・願望・思惟・思想のいずれかから湧き出たものである。

川柳を面白がる回路は川柳人それぞれが持っているはずである。もちろん、川柳自体にも確固とした回路は存在しているはずである。しかし、その回路があいまいで更新されておらず、結果として衰弱しているのが現状である。川柳を面白がる回路を持つにはどうすればいいのか。それは川柳の読みの更新が必須であり、川柳を読む力、嗅ぎ分ける感性を鍛えるしかない。読みの力を更新するには言葉と真摯に向き合わねばならない。表面をなぞるだけの読みでは回路はいつまでたってもあやふやなままである。ぬるま湯の中に浸かり、わからないとスルーしていたのではいつまでたっても回路は丈夫にならない。川柳は言語表現である。句の筋だけを追うのではなく、言葉を、言葉の関係性を追っていく。なにを面白がっているのかを自分なりに見極めていかなくては回路としては成立していかない。川柳の読みは川柳を書くことに直々に影響し、関わってくる。川柳の読みが更新されなければ、自ずと川柳作品も更新されていかない。

川柳とは何なのか。何をもって川柳になるのか。川柳と向き合う時にいつもついてまわるテーマである。言葉を並べただけでは川柳にはならない。いかにすれば川柳になるのか。そのどこをどうすれば川柳と呼べるものになるのか。いきあたりばったりで川柳を書いてきたのではないはずである。川柳を書くとは、川柳で書くとは、川柳にするとはどういうことなのか。川柳の回路を確認、点検、修正、更新し、自分なりの川柳の書き方、読み方を見つけていきたい。

（注）田島（田島健一さん　俳人）福田（福田若之さん　俳人）鴇田（鴇田智哉さん　俳人）。件の座談会は岡井隆さんが金子兜太さんを通して川柳の前衛作家と座談会をしていて、その模様は昭和四十年一月の「俳句研究」に掲載された。

後記

我が家は村のお寺の保育園だった。しかし、時代の趨勢で、敷地内にあった保育園が新築移転した。それで旧園舎の解体が行われた。解体作業を間近で見るのは初めてである。見るまではどちらかというと乱暴な作業だという印象を持っていたが、きびきびしたその仕事の鮮やかさと緻密さに驚いた。たとえば、ユンボのアタッチメント（ヘッド）のどれを使って、どこを壊すかなどプロの仕事の見事さを目の当たりにした。コンクリートの中には数多の鉄やパイプや鋼などが埋め込まれていた。廃材はそれぞれに分けられ、置かれるが、その種類の多さは想像以上だ。あれだけのものが寄り集まって、建物が建っていたのだ。水道管もあらわになった。水漏れの原因もやっとわかった。隣りの家も前の家も近づいてきた。見えなかったものが見える。

嫁いでから、ずっと、家の前に保育園のある生活をしていたので、更地になっていく過程は最初は寂しく、心にぽっかりと穴があいていくようだった。毎夕、工事の人が帰ると境内に出た。ああ、今日はここがなくなったのかと確認する。そして、大きく息を吸う。徐々に少しずつ清々しくなる。いままで壊れるものや壊されていくもの、無くなっていくものにあまり関心を持っていなかったことに気づいた。作り上げるもの、出来上がるものばかりに目を向けていた。だだっ広くなった境内を、さて、どうしようかと家族で話し合っているが、しばらくはこのままのなにもない状態にしておくつもりである。それはとても貴重で、いろんなことを考えさせてくれる時間のような気がしている。

川柳誌「晴」を創刊する。新たなことを始めることに臆病になっていた。何か始めるのですか、いつ始めるのですかと、聞かれても、何も答えられなかった。当分はゆっくりしますとしか言えなかった。このまま、何もしないでいいと思っていた。もう出来ることは何もないと思っていた。しかし、これでいいわけがないこともわかっていた。

動こうと決断すれば、早かった。私の出来る範囲のことをやればいいのだと開き直った。メンバーもすんなりと決まった。広瀬ちえみさんと松永千秋さんは長年の親友であり、頼りになるおねえさんたち。水本石華さん、きゅういちさん、月波与生さんは、それぞれの柳誌や各分野での活躍に注目していた。作品とエッセイを読んでいただけたらおわかりだと思うが、メンバーはおのおの見ているものも、見ている方向も同じではない。そこから「晴」のカラーが作り出せたらと思っている。

佐山哲郎さんには無理を言って玉稿をいただいた。佐山さんの原稿が諸事情で一か月前に届いた。それは自分の原稿がにっちもさっちもいかないときだった。佐山さんの文章を読んで、何を私はええかっこしているのだろうか、無理をしているのだろうかと思った。すうーっと気が楽になった。こういうふうにして、いままでも私はいろんな人に助けられて川柳を続けてきたのだとあらためて思った。

表紙絵は野口毅さんの「ふわふわ」である。二〇〇八年アクリル美術大賞展の入選作である。野口毅さんは一九八九年生まれ。俳人で句会仲間の野口裕さんのご子息である。

微力だが、持っているものを出せる場があることが何よりも嬉しい。どうぞ「晴」をよろしくお願いします。（樋口）

GUEST

佐山哲郎（さやま・てつろう）

句誌『月天』同人代表。「塵風」「百句会」所属。2011 年スタジオ・ジブリ作品『コクリコ坂から』原作。著書『童謡・唱歌のなくなる日』（主婦の友新書）ほか。句集『じたん』『東京ばれおろがす』『娑婆娑婆』（共に西田書店）。

MEMBER

水本石華（みずもと・せっか）

本名・佛渕健悟（ほとけぶち・けんご）、俳号・雀羅。鹿児島県川辺町生。
俳句は澤村昭代、連句は東明雅に師事。季語研究会同人。平成 16 年南州庵立几。『朱欒日和』（独吟歌仙百巻等／私家版）、『連句俳句季語辞典 十七季』（共著／三省堂）、『平成連句抄一月と花と恋と』（共著／三省堂）、『五七語辞典』（共著／三省堂）等、『猫の国語辞典』（共著／三省堂）。各地で連句・俳句講師。

松永千秋（まつなが・ちあき）

「バックストローク」、「カード」同人を経て、現在　久留米番傘川柳会同人・発表誌「かすり」編集人。
共著『現代川柳の精鋭たち 28 人集』、『セレクション柳人松永千秋集』。

広瀬ちえみ（ひろせ・ちえみ）

「川柳杜人」同人・編集。「垂人」編集発行。
句集『ひ・と・り・遊・び』、共著『現代川柳の精鋭たち 28 人集』、『セレクション柳人広瀬ちえみ集』。

きゅういち

2003 年作句開始。川柳結社「ふらすこてん」同人。川柳「北田辺」会員。
句集『ほぼむほん』
言葉の持つそもそもの意味はもちろん、さらにそこへ重ねられる言葉によって意味本来の質感、空気感、匂いや温度までもが変わり、揺さぶられる感情は他では得られないおもしろさと可能性があると信じている。

月波与生（つきなみ・よじょう）

「おかじょうき」を起点として、いろいろなステージに川柳を提出している。川柳はどこへ向かっているのか。どこへも向かっていないのか。そもそも動いているのか、いないのか。同時代を川柳で書き続ける柳人と語り合いたい。

樋口由紀子（ひぐち・ゆきこ）

句集『ゆうるりと』『容顔』『セレクション柳人樋口由紀子集』
エッセイ集『川柳×薔薇』共著『現代川柳の精鋭たち 28 人集』『セレクション柳論』。

晴　　第1号
2018年1月15日発行
編集発行人　樋口由紀子
発行所　〒672-8004　姫路市継479
TEL 079-246-0730
制　作　私家本工房
〒569-0097　高槻市高垣町1-22
TEL 072-655-5926
（非売品）

h a r e

vol. 1